

一〇二三年一月六日

バトカーが駆け抜く仕事始めかな
初電話心配される齡となり

弾初に夫の拍手を賜りぬ

一〇二三年一月五日

連鎖して大杉震ふ雪解かな

双六の折目に駒の浮ひてをり
げんこつを貰つて終はる初喧嘩

一〇二三年一月四日

水鳥が押し分けてゆく薄氷

産みたてと掌に享く寒卵

さし交はす大樹の秀枝淑氣満つ

前掛けに手拭ひつつ御慶受く

日常の二人に戻る四日かな

放棄田に農学部員鍬始

一〇二三年一月三日

屋号にて御慶を交わす宿場町

澄子

かかし

せいじ

ひのと

むべ

豊実

かえる

ひのと

隆松

素秀

ひのと

一〇二三年一月二日

朝の日の眩しさへ置く雑煮かな
初茜観界展ける七合目

牧草のロール転がす北風

愛正

一〇二三年一月一日

輪唱のごとくに峠の除夜の鐘

恙なく一行記す初日記

愛正

一〇二三年二月二日

かみしめる今の安寧晦日蕎麦

煤逃や立ち読みしたる料理本

ゆく年の真上に来たる観覧車

ひのと

なつき

毎日句会みのる選・一〇二三年一月八日